

カンピロバクター感染症に関する研究

～本市にて分離された *C. jejuni* 株とギランバレー症候群との関連について～

保健科学課 松田 正法

平成 24 年度県内保健環境研究機関合同成果発表会

近年、カンピロバクターは細菌性食中毒の病因物質として常に上位を占めており、その 9 割以上はカンピロバクター・ジェジュニ (*C.jejuni*) の感染による。食中毒症状の予後は良好であるが、まれに末梢神経障害を引き起こすギランバレー症候群 (GBS) に移行することが知られている。

しかし、ヒトや食品から分離された *C.jejuni* 菌株について GBS との関連性を調べた報告例は国内では少なく、その実態は明らかとなっていない。そこで本研究では、当所において腸炎患者および食肉類 (主に鶏肉) から分離された *C.jejuni*123 株について、GBS 発症に関連する 3 種のガングリオシド様リポオリゴ糖生合成遺伝子の保有状況を調査した。

調査の結果、3 種の GBS 関連遺伝子をすべて保有する株は腸炎患者由来の 56 株中 9 株 (16.1%)、食肉類由来の 67 株中 10 株 (14.9%) に認められた。

GBS 発症には未解明な部分があるため、今回の調査結果のみで一概に *C.jejuni* による GBS 発症のリスクについて言及することはできないが、鶏肉を生で食べたり、加熱不十分な調理法では、カンピロバクター食中毒だけでなく、GBS 発症のリスクが潜んでいると考えられる。